

長崎県地学会10年の歩み

1. 創立総会まで

長崎県地学会は、昭和46年9月24日をもって、満10年の誕生日を迎えました。10年前のこの日には、日本地質学会西日本支部の例会が、長崎大学においてはじめて開かれましたが、地学会は開会前のわずかな時間をかりて、設立までの経過報告と役員選出を行なって、正式に発足しました。初代会長には長崎大学の佐藤隆夫教授が就任しました。この創立総会の出席者は25名でした。当日の夜は、長崎国際文化会館で開かれた地質学会の懇親会にも、地学会より早速14名の会員が加わり、引続き矢太楼で仲秋の名月と長崎の夜景を楽しみました。

さて、本会が発足する気運がわいてきたのは、昭和36年5月頃でした。当時の長崎大学学芸学部の地学教室が中心となって、会の運営方針を立案し、一瀬亘、林徳衛、石井哲夫の諸先生に意見を求めながら計画を進めました。さらに発起人をつのり、6月に長崎県地学会設立趣意書と会則（案）に、入会申込書をそえて、関係各方面に発送したのが6月27日のことでした。この時、発起人として名を連ねた方達はつぎの通りです。

石井哲夫・一瀬 亘・井上昌幸・大塚裕之・鎌田泰彦・小柳孝夫
佐藤隆夫・橘 行一・田口 満・西沢利男・林 徳衛・堀口承明

長崎県地学会の目的は、会則第2条にもあるように「長崎県の地学に関する科学的研究や調査を行なうと共に、その知識の普及や会員相互の親睦を図る」ことにあります。しかし、もっと具体的に地学会の結成が要求される背景にはどんなものがあったのでしょうか。10年前に配布された設立趣意書には、その創立の精神がはっきりと示されておりますし、その趣旨は今日でもなお生きていると考えられます。そこで、少し長くなりますが、本会の“基底れき岩”的記録として、その全文をつぎに掲げておきましょう。

拝啓 初夏の候いよいよ御多祥の事と存じます。

さて、新しい学制に「地学」が本格的に取入れられて以来、自然科学における地学的関心が、次第に高まって来たことは、大変慶ばしい限りです。

地学の内容には、多分に、地方的な特色が濃く、その意味で、郷土の地質や気象などについての知識が強く要求されます。最近では、特に、教職にたずさわる方々より、しばしば地学的教材の取扱いに困惑しているとの声も耳にします。また風水害・地すべりなどの災害や、地下や海底資源の開発、土地利用など、我々の身のまわりには、たえず地学で取扱うべき自然現象やその利用の話題が、新聞紙上を賑わす昨今です。

そこで、今度、新たに、長崎県の未開拓の面が多い地学的自然環境に、深い関心を持たれる同好の士が相寄って「長崎県地学会」を結成し、活動を始めることになりました。

本会の運営は、別紙、会則（案）に盛られておりますが、是非入会の上、今員相互の理解の上に立って、各人が本会の発展に努めて頂きたいと存じます。

なお、知人・友人に御伝声の上、ふるって御参加下さいますようお願い上げます。

敬具

昭和36年6月 日

長崎県地学会 発起人一同

2. 日曜地質巡検会

本会の活動として、はじめから強く望まれたのは、野外における地質実習でした。そこで、原則として毎月第3日曜日（日曜日が5回ある月は第4日曜）に、日曜地質巡検会を県内各地で開くことにしました。実際やってみると、6月は梅雨、7・8月は学校の休暇、12・1・2月は年末・年始と厳寒期ということで実施がむづかしく、春と秋の年間6回の行事にかたまってきました。それが積み重なって、10年目の9月には第61回の巡検会を加津佐で行なうことができました。同じ日に、県北と県南とで同時に催したことが2回ありま

すから、訪れた地域は63か所になります。この中には、佐賀県の竹崎火山や有田付近、熊本県の福岡半島に、日帰りで遠征したこともあります。また五島支部では、独自の計画で巡検会を活発に行なっておりますし、島原半島南部の会員が中心となって結成した「はまゆう地学会」も地域の調査研究に余念がありません。

日曜地質巡検会の参加者は、記録に残っていない2回分を除いて延 1,592名に達します。このうち、正会員と一般は 1,145名で、学生・生徒が 447名でした。学生・生徒の数が多い理由の一つには、高校の地学クラブ員の参加が盛んであったことによります。その積極的な参加による研修の成果が、昭和45年度の読売科学賞の高校の部において、長崎西高地学部と長崎南高地学クラブの共同研究による、「沖ノ島における化石オウムガイの研究」が、文部大臣賞受賞に輝いたことにもつながったものと考えられます。

この地質巡検会は、一般の講習会のように、講師をよんで受講するような形をとりません。一緒に歩く仲間が先生であり、生徒です。お互いの知識・経験の不足を補いながら、郷土の自然に親しみ、同好者の親睦をはかってきました。しかし、6年目を迎えた第30回より、世話人をたてることにしました。これは、巡検地の地理や地質に明るい人になってもらい、無駄のない計画をたてて、効果的な会にするために始めたことです。また世話人は、後でその日の巡検の様子を織りこんだ記事を書き、会誌にのせるようにしています。これが、各地域の巡検のガイドブックの役目をしています。

毎月1回の巡検会ではあきたらず、学校の夏休みに県外に地質旅行をしたいという希望がたびたびです。しかし、休暇中には長崎県理科教育協会の現地講習会をはじめ、種々の行事があるので実現しません。ただ一度、昭和39年8月7日より3泊4日で、熊本県の球磨川下流の中・古生層の見学に出かけたことがあります。参加者は17名で、三畳紀の地層からモノチスの化石を採集したり、鳥ノ巣石灰岩や、薄衣型の二畳系のれき岩などを見ることができました。

3. 室内研究会

梅雨時や寒い季節には、室内研究会を数回行ないました。主に、岩石薄片の作製や、岩石顕微鏡による検鏡の実験です。県内には火成岩や変成岩の分布が広いので、岩石を薄片にして検鏡することはきわめて重要な研究方法になっています。長崎に出張中の地質調査所の技官に、薄片作製の模範的な技術指導を受けたこともあります。この普及活動の結果、多くの会員が薄片作製をあまり苦にしないでやれるようになりました。

4. 総会と討論会

本会創立後、初めての総会は、第2年目の昭和38年6月16日に、長崎大学において開催しました。佐藤隆夫教授の「空はなぜ青い」の会長講演のあと、「長崎県における地学教育上の諸問題」というテーマで討論会を行ないました。小・中・高のそれぞれの立場から田口満・田島俊彦・中山善寿が講演し、石井哲夫の司会で、小・中・高を縦につらねた地学教育について活発な討論がかわされました。議論はさらに発展して、今後の本県における地学教育と地学会のあり方について有益な意見がだされました。この討論はテープに収められ、発言はそのまま活字にして会誌第2号に8ページにわたって再現されました。この中の重要な部分は、日本地学教育学会の機関紙「地学教育」に再録されています。

昭和41年9月18日には、大村高校において、創立5周年記念大会を開きました。特別講演として、長崎大学外山三郎教授の「鉱物教育よもやまばなし」、大村市萱瀬中学校田中大二校長の「西ヨーロッパの地理的考察の概況報告」、元壱岐霞翠小学校林徳衛校長の「欧米見学記」があり、外山教授のお話は会誌第8号にもれなく再録されています。また討論会のテーマとして「地学と地理学との境界」をえらび、小林茂と堀口承明の司会で討論がかわされました。議論の焦点は、地学と地理学との重複にしばられ、自然科学と社会科学の物の見方の相異点をえぐる貴重な意見がだされました。

第7年総会は、昭和43年6月23日、長崎大学教育学部で行なわれました。3人の会員の研究発表のあと、九州大学松下久道教授の「長崎県西彼杵の海底炭田」と題する特別講演があり、最近の海底炭田の開発にまつわる調査事業の実態に接することができました。また「長崎県における地学現象の特性」というテーマで、討論会が行なわれました。あらかじめ司会者の鎌田泰彦と丸山稜人がえらんだ、長崎県内の特色ある地質・天文・気象的自然現象について、長時間意見がかわされました。

10周年記念大会は、昭和46年11月7日に諫早高校において行なわれます。特別講演の野田光雄博士の「日本最古の基盤岩を探る」が期待されます。

5. 会誌・そくほう

長崎県地学会誌の発行は、本会のもっとも重要な事業の一つであり、年2回を目安として刊行を続けてきましたが、第16号まで既刊されています。内容は研究発表や教材研究などの、会員の研究成果が中心となっていますが、「他山の石」として県外各地の見学記や随想などもあります。日曜地質巡検会記事は、地域の地質案内としても役立っているようです。第1号から連載した「長崎県地学文献目録」の地質の部は、第7号で一応完結しましたが、県内を大きく8地域に分けて、320編の地質論文の著者・表題・雑誌名などを掲載しました。いずれ昭和41年以降の文献を紹介する必要があるものと考えられています。

事務局が長崎西高に移ってから、NESASokuhouが毎月1回だされるようになりました。巡検会の案内、会員の移動、会員の便りなど、会員相互の連絡や情報交換の場として楽しく利用されています。

6. おわりに

基礎づくりの10年が終り、次は躍進の10年となることでしょう。一瀬亘会長を中心とする200余名の会員の活躍が期待されます。

(鎌田泰彦)